

もとさくらきたおおほり 本佐倉北大堀遺跡

—発掘が語る中世戦国時代の城下町—

嘱託調査研究員 天本昌希

本佐倉北大堀遺跡と本佐倉城

本佐倉北大堀遺跡は酒々井町の西部、印旛沼南岸の標高約34mの台地上に立地する。本遺跡から北に約1kmには中世戦国時代の^{しもうき}下総国守護である千葉氏の居城である本佐倉城がある。千葉氏は鎌倉幕府成立に貢献した東国の名族であるが、戦国時代後半に一族の内紛から千葉市の^{いのななじょう}亥鼻城（千葉城）から酒々井町の本佐倉城に本拠を移す。その後約百年ほど下総国を治めるも、天正18年（1590年）、同盟関係にあった小田原の北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされ、千葉氏も命運を共にすることとなる。

そのため本佐倉城の周辺にはその家臣団の屋敷が多数存在し、本遺跡はそのような城下の様子を伝える遺跡である。また、国道296号線のバイパス沿いに展開する事から道路や店舗の建設に伴い複数回の調査が行われてきた。これまでに北大堀遺跡または本佐倉北大堀遺跡などと名称が一定ではなかったが、これらが本佐倉北大堀遺跡として統一される。今回の発表で中心となるのは平成17年5月～6月まで発掘調査を行ったもので、調査面積は720㎡である。中心となるものは奈良・平安時代と中世戦国時代であるが、ここでは中世の成果について見ていきたい。

調査の成果

今回の調査では掘立柱建物跡や墓と思われる土坑や溝、堀などを検出した。その中でも1号堀は東西に約40mにわたり、更に調査区外へ延長するもので、この堀は幅3m、深さ2mになり、断面形がV字を呈する^{やげんぼり}薬研堀と称されるものである。途中、一部を掘らずに残した土橋を設けている。本遺跡における出土遺物の多くはこの堀に廃棄されたもので、^{とうじ}陶磁器類のほか、ハマグリなどの貝殻や馬の死骸なども

廃棄されており、当時の生活を伝えている。

では、この堀はどのように築かれているのであろうか。先に述べたように本佐倉北大堀遺跡はこれまでに複数回の調査が行われ、それらの調査においても同じような形態の堀が数条検出されている。この堀の方向と位置を図面上に合わせたのが第1図である。すると堀は直線的に続くのではなく、およそ53m×67mの規模で方形に囲うことが推測できよう。そしてこの堀の内側には多数の掘立柱建物跡が存在することから、ここが^{ぼうぎょ}防御のため堀を周囲に巡らせた館跡であることがわかる。

北大堀館跡

この館跡は文献中にも確認できる。江戸時代に記された『^{さんげいき}成田山参詣記』という書物に「本佐倉村千葉家故城址の図」という絵図がある。本佐倉城ほか千葉家の家臣の館跡を記したものであるが、そこには^{せいこうじ}清光寺という現在ものこる寺院が記され、その隣には「万千代殿ヤシキ」とある。これは本佐倉城が滅亡した1590年の後、徳川家康の五男、^{のぶよし}武田信吉（＝万千代）が本佐倉一帯を治めるにあたり、この地に居館を構えたことに由来するものである。清光寺の位置と本佐倉北大堀遺跡の発掘調査から浮かび上がる堀で囲まれた館跡の位置はこの「万千代殿ヤシキ」の位置と一致するものである。しかし、出土遺物をみると1590年以前のものも多数存在することから、おそらく新たに居館を建築したのではなく、それ以前からあったものを利用したと考えられる。ここではこの館の存続期間を16世紀中頃～17世紀初頭とし、この館跡を北大堀館と呼ぶことにする。

^{ステータス}権威を表すもの

それではこの北大堀館の住人はどのような人物だ

ったのか、出土遺物から検討してみよう。本遺跡のおもな出土遺物は陶磁器であり、外来のものでは大陸からもたらされた染付皿や白磁、青磁の壺などが、国内のものでは愛知県の瀬戸窯や常滑窯でつくられた茶碗や播鉢、甕などが出土している。在地の土器では内耳鍋やカワラケと称される素焼きの皿がある。これらは日用品として消費されたものと、そうではなく、所有者の富と権力を示す非日用品がある。

非日用品のうち、ひとつは当時的高级品であり、大陸からもたらされた青磁や白磁などの陶磁器である。その中でも特に茶器や花、香などに関する道具や宴会に用いる酒瓶などは贅沢品としてのステータスシンボルであった。例を挙げると文献には茶碗1つが8000文という記録が残っている。当時の大工の日当が100文という記録を合わせて考えると大変な高級品であったといえよう。そのためこれら高級陶磁器は一般的な中世遺跡から出土することは少ないが、本遺跡からは破片ながら青磁の花生や酒会壺、大皿などが出土し、その権力の大きさをうかがわせる。

もうひとつの非日用品は素焼きの皿、カワラケである。カワラケは先に述べた高級陶磁器とは対照的に、1枚の価格は最も安かったと考えられるが、現在の研究では日常的に使用された器ではないと考えられている。その理由はカワラケの出土状況にある。多くの遺跡においてカワラケが出土する場合、割れていない完形品が多数存在する。他の土器の場合、皿や碗はほとんどが破片であり、鍋などであれば焔や磨耗など使用の痕跡が多くこのされているのは対照的である。平成17年の調査における1号堀の一部、面積わずか6㎡から80点もの完形のカワラケが集中した状況で出土した。日常的に破損したものをその度に棄てていたものではないといえよう。また、出土する場所も領主の居館などでは出土遺物の9割近くがカワラケであるのに対し、外縁部ほどその割合は低くなる傾向がある。

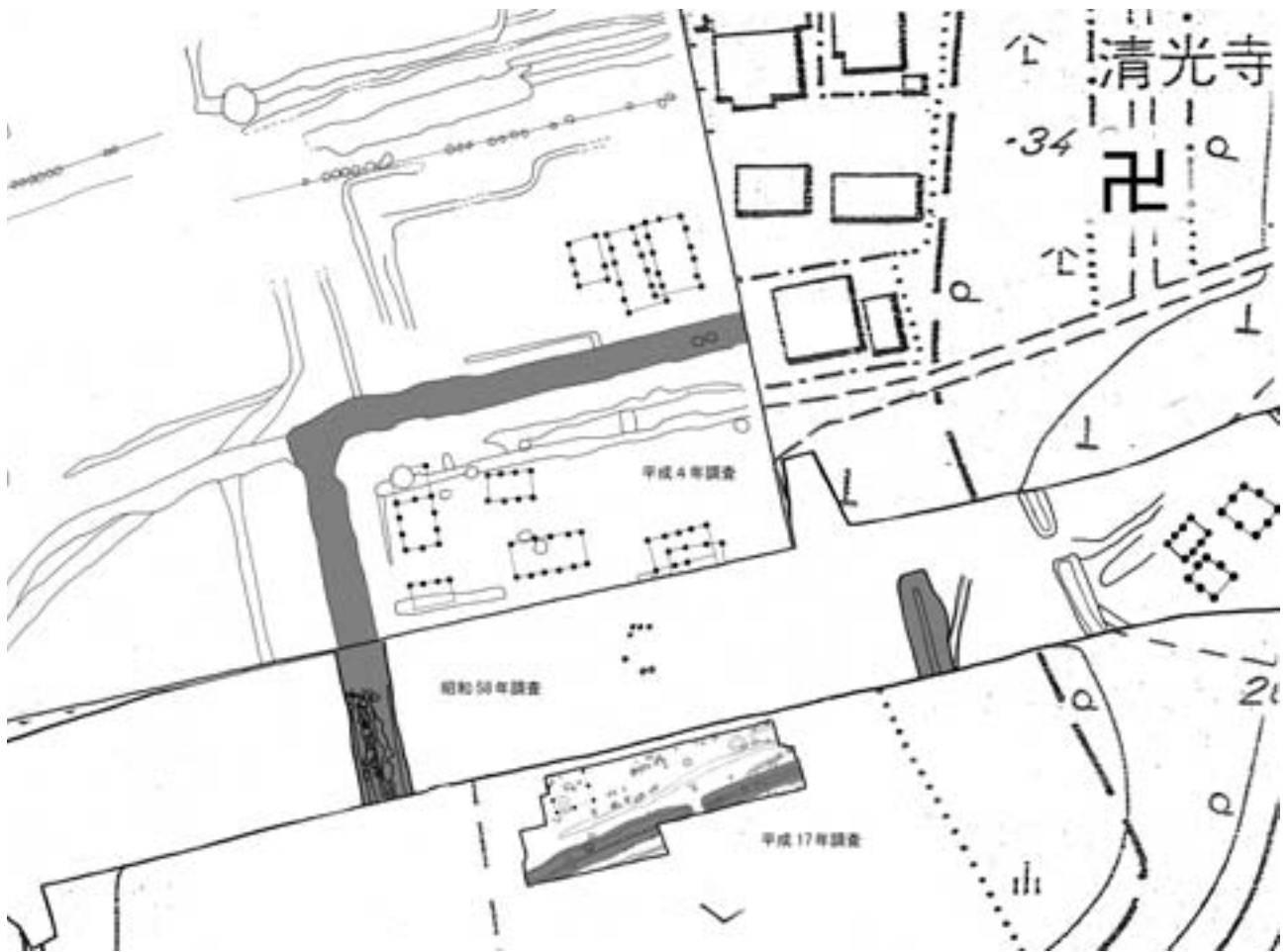
このように特殊な出土状況を示すカワラケの用途の解釈として、饗宴や祭祀などの場において用いられ、素焼きのカワラケは汚れが染み込むため原則再

利用されずに使い捨ててまとめて廃棄されたと考えられる。そして使い捨ててしまうカワラケは1枚あたりの価格は安くとも、大量に消費するためその出費は非常に大きなものとなる。

このようにカワラケと高級陶磁器は対極にありながら、両者とも所有者の権威を反映するものといえよう。現在の成果からは北大堀館の住人がどのような人物であったのかについて、具体的に言及することはできないが、彼は相当な権力者であったことが予想できる。今後の調査結果の更なる進展を期待したい。

城下の景観

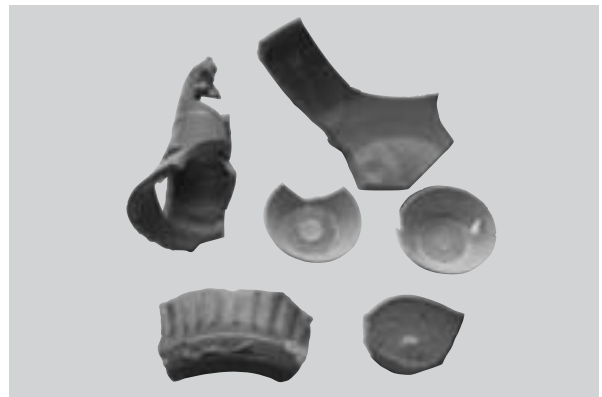
これまでに本佐倉城下周辺の発掘調査は本佐倉北大堀遺跡の他にも多くの遺跡が調査されている。本遺跡と同様に堀を巡らせた館跡は長勝寺脇館跡や北押出し遺跡などからも検出されている。また、館跡の堀とは別に幅7mを超す大型の堀が検出した遺跡もあり、本佐倉城下には多くの館跡や防御施設が存在したことがわかる。これら発掘調査の成果から明らかになった館跡や文献に記されるものの位置を航空写真に落としたものが第2図である。すると本佐倉城は北に印旛沼を望み、それ以外の方向を多くの屋敷が囲むように建っていることがわかる。屋敷跡はいずれも台地縁辺に建てられ、また、大型の堀は台地の狭まる部分につくられている。惣構という戦国時代の末に確立した、城とその城下を堀や土塁で囲む都市設計方法が小田原城などでもみられる。本佐倉城は全面に堀や土塁といった人工物を巡らせるのではなく、自然地形の急斜面を堀に見立て、部分的に堀や土塁を巡らし、要所に防御施設の整った館を配すことで「惣構」の構造をとっているのではないだろうか。その範囲はおおよそ直径1.5kmにおよび、その中に家臣団、商人や職人が集住していたことが予想される。発掘調査により多数の溝や柵列が東西方向に走り、掘立柱建物跡も多数存在することがわかっている。今後の調査の進展により、本佐倉城とその城下に住む人々の姿が鮮やかに浮かび上がってくるだろう。



第1図 北大堀館



調査区空撮 平成4年調査



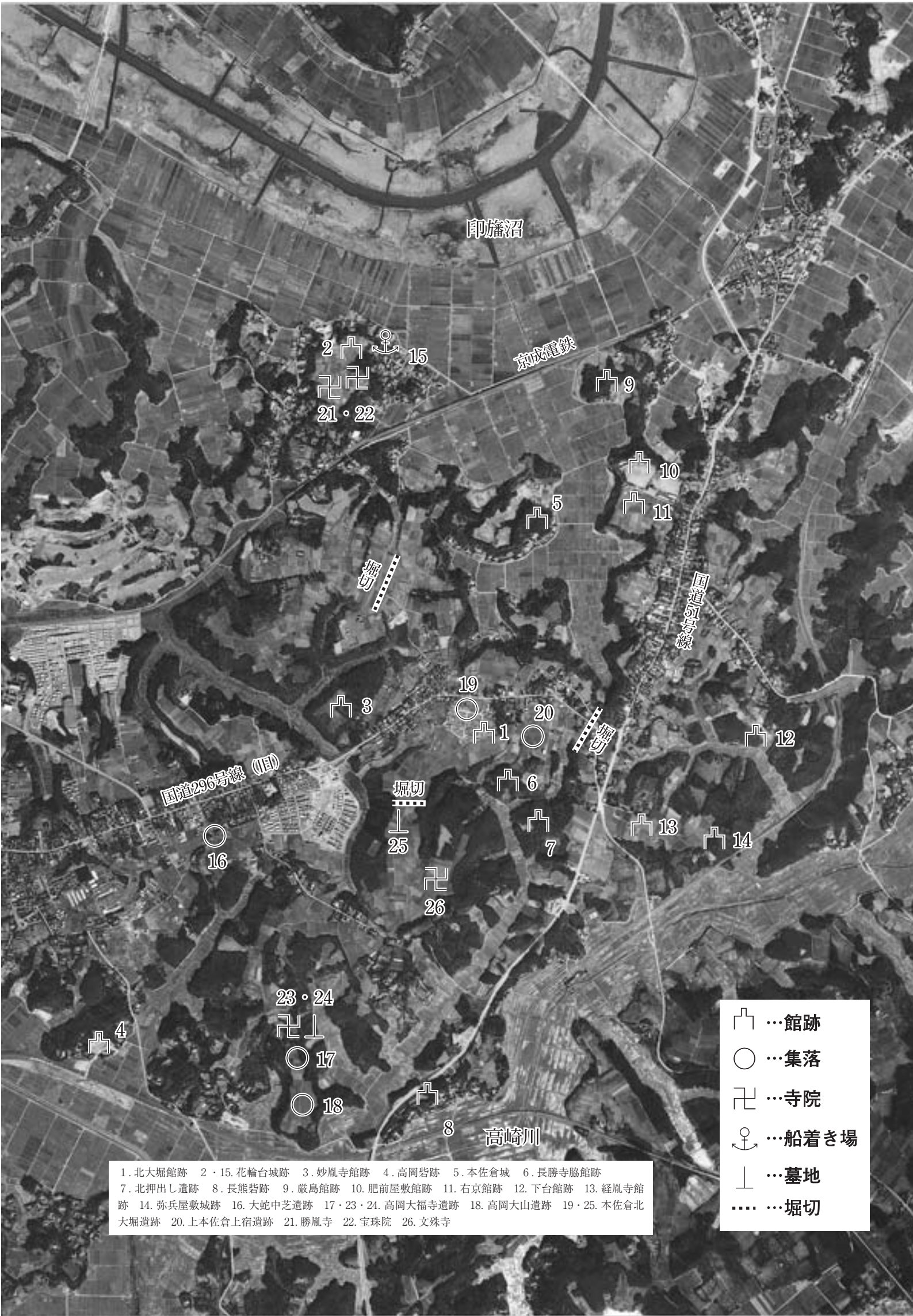
高級陶磁器



調査区空撮 平成17年調査



カワラケ



印旛沼

京成電鉄

国道51号線

国道296号線 (旧)

高崎川

2 15
21・22

9
10
11

5

堀切

19
20

3

12

堀切

1
6
7

堀切
25

13
14

16

26

23・24
17
18

4

8

- ☰ …館跡
- …集落
- 卍 …寺院
- ⚓ …船着き場
- ⊥ …墓地
- ⋯⋯ …堀切

- 1. 北大堀館跡 2・15. 花輪台城跡 3. 妙胤寺館跡 4. 高岡砦跡 5. 本佐倉城 6. 長勝寺脇館跡
- 7. 北押し遺跡 8. 長熊砦跡 9. 巖島館跡 10. 肥前屋敷館跡 11. 右京館跡 12. 下台館跡 13. 経胤寺館跡
- 14. 弥兵屋敷城跡 16. 大蛇中芝遺跡 17・23・24. 高岡大福寺遺跡 18. 高岡大山遺跡 19・25. 本佐倉北大堀遺跡
- 20. 上本佐倉上宿遺跡 21. 勝胤寺 22. 宝珠院 26. 文殊寺